
コードギアス 幸福のかたち

月城十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 幸福のかたち

【Nコード】

N2030M

【作者名】

月城十夜

【あらすじ】

ルルーシュの誕生日当日、C・Cはある贈り物を用意した。予想もしなかったショックを受けるルルーシュ。
ほのぼのラブです。

第一話：ルルーシュの誕生日（前編）

「ルルーシュ、誕生日おめでとう」

そう言いながらC・C・は古風な封蝋の押下された巻紙をルルーシュの面前に差し出した。

とっさにそれを受け取りながらも、ルルーシュは小首を傾げる。

「さて、ラブレターという雰囲気でもなさそうだが」

「書いてほしいのか？」

「書きたいときは、おまえのほうから自主的に書いて寄越してくれ」
悪戯に返しながら何の気なく封を開けかけた指先を、C・C・の白くて透き通った指先が毅然とした様子で押し留めた。

「先に断っておくが、その中にはおまえが生まれた日の様子が詳細に書き記してある」

「――何？」

「おまえが過去には拘泥しないことを知っている。だから余計な世話だと思ふなら、封を開けずにそのまま捨ててくれ」

温和な雰囲気から一転して、眉間に厳しく皺を刻みつけながらしばらくC・C・を見つめていたルルーシュは、やがて肩から余計な力を抜き去ると、小さく吐息しながら続けた。

「余計な世話だと、わかっていゝならどうしてわざわざ用意する？」

C・C・は、まだいささか緊張感を残している様子だった。

「最終的に選ぶのはおまえだが、選択肢を用意する義務が私にはあるんじゃないかと思つてな」

だからここ数日、気が塞いでいたのかとようやくルルーシュは納得をした。

「まさか、おまえが立ち会っていたとはなァ」

ふたたび悪戯に問い返すと、C・C・はそれはそれでまた複雑そ

うな顔をしてみせる。

「年齢差を実感するだろう？」

「別に？ だからどうと言うほどでもない」

「強がりだけは一人前だな」

言いながら、きびすを返して部屋を出て行こうとするので、不思議に思いながらルルーシュはその背中を引き止めた。

「どこへ行くんだ？」

C・C・はすこし困っている様子で返した。

「読むつもりでいるんだろう？ だったら、私は邪魔だろう」

「余計な気を回さなくてもいい、座ってろ」

見ているうちにもさっそく封を外し始めているのに気付いて、C・C・は小さく息を漏らしながら、日当たりの良い窓際のソファに腰を下ろし直した。

数メートルと離れていない場所から、パラリパラリと紙を繰る音が聞こえてくる。

意識的に窓の外の様子にじっと視線を据えていたのだが、後になって考えても何を見ていたかは記憶に残っていなかった。

それからどれくらい時間が経過した頃だろう。

やがて絨毯の上にカサリと紙の束を投げ出す音が聞こえてきて、思わずぴくりと反応してしまったC・C・の背後に、音も立てずにルルーシュが立っていたのに気付いた。

肩越しに視線を投げているC・C・の頭上から、なんとも複雑そうな溜息が聞こえてくる。

「なァ、あの紙の中の親父は馬鹿だろう？ あいつの何人目の子供だと思っただ、俺は」

C・C・はほんのり様子を窺う気分で上目遣いにルルーシュを眺める。

「さあな？ ただ、マリアンヌにとっては初産だったからな。破水してから実際に生まれるまで、ずいぶん時間が掛かったのは事実だ」
事前に静と動のふたつのパターンで大体の反応は予測済みだった。

しかし、そのどちらともわずかに違った反応を示しているルルーシュは、そこでまた一度息を吐き出したかと思いきや、何も言わずに突然C・C・をお姫様ダッコの状態で抱き上げた。

驚いてしまったのはC・C・だが、ルルーシュがそのままソファに腰を下ろしてしまったので、強制的に膝の上に載せられたまま怪訝そうにすぐ目の前にある男の顔を眺めた。

「……ルルーシュ……？」

ルルーシュは、探りの眼差しから逃れるようにして、軽く抱き寄せたC・C・の胸元にひたいを押し付けた。

一切の表情を失くした声音で訊ねる。

「……V・V・が……母さんを殺してなかったら……また違ったとおまえなら考えるか？」

C・C・は、ほんのり少し逡巡して、結局ルルーシュのうなじ辺りに片手を添えるだけに留めた。

「さあな。……無責任なことは言いたくない。私が何を言っても、それはただの憶測だ」

「ああ。そして現にいつらが、俺とナナリーを捨てた事実に変わりはない」

——それでも、とC・C・は考える。

おそらくルルーシュが考えている『もしも』の可能性に恐れを抱いてしまったからこそ、V・V・はマリアンヌに手を下してしまったのだ。『嘘のない世界』を作るという約束をシャルルに守らせるために。

そして、またシャルルも、マリアンヌを失ってしまったことにより、なかば強制的にその約束を実行しなくてはならなくなってしまう。

それは、きっと、マリアンヌを自分のかたわらに取り戻したい一心で？

——なぜ、V・V・を殺した？

結局その質問に答えの得られなかったC・C・に、真理は得られない。

C・C・は、自分のほうからも軽く抱き寄せるようにして、両手でルルーシュの首筋を抱き締めた。

黒髪をつむじ付近に頬をそっと寄せ合わせる。

こうした距離にずっといられたなら、あるいはきつと違ったのかもしれない。

マリアンヌがシャルルのかたわらで頻繁に垣間見せていた、幸福に満ちた笑顔を彷彿としてしまう。

その光景を客観的に眺めながら、C・C・がたびたび羨望を抱いてしまったことだけは事実だったから。

幼少時代のルルーシュが、嘘偽りない家庭の温もりの中で育ってきたことだけは事実だったから。

それを実感していたからこそルルーシュも——。

しばらく寡黙にC・C・の温もりのかたわらで気持ちの整理を続けていたルルーシュは、ややあってほんのり力を抜いた様子で訊ねた。

「ひょっとして、ナナリーの生まれた日のことも知っているのか？」

「うん？ いや、あいにくその頃には私もいろいろ忙しかったからな。おまえのほうが良く知っているんじゃないのか？」

「馬鹿を言うな。3歳児の記憶をあてにするな」

「そうか」

それでもルルーシュのことだから覚えていても不思議はないと思っただが、ルルーシュはなぜだかそこで一度口を閉ざしてしまうと、ほんのりためらいがちに続けた。

「……ただ、なんとなく……おぼろげに覚えているような気がするだけだ」

言いながら、目元をポツと染めて見せたルルーシュは、指先で軽く戯れるようにしていたC・C・のシャツのボタンを、結局そのまま外し始める。

C・C・は、されるがままにそれを見つめていたのだが、やがて背中側の下着のホックを外されたところで、とりあえずの疑問を発してみた。

「一応、別に祝いの準備も整えてあるんだが、今はこっちの方が良さそうだな？」

ルルーシュはすこし無然とした様子で、それでも指先だけは黙々と仕事を続けながら答える。

「……わかってるなら、いちいち聞くな」

見やれば、耳朶まではつきり朱に染まっているのに気付いて、C・C・は軽く微笑んでしまいながら唇の上にキスを落とした。

「――：誕生日おめでとう、ルルーシュ。なにはともあれ、私に出会ってくれたおまえに感謝しているよ」

ルルーシュは、思わずといった様子で軽く笑って、続ける。

「おまえが俺を見つけたんじゃないかったのか？」

「そうだぞ？ たがいが互いを見つけたんだ。……運命なんて陳腐な言葉は使いたくないからな」

それを言うC・C・をまじまじ眺めていたルルーシュは、やがていかにも幸福そうな様子を見せて笑った。

愛しい男の笑顔にはもちろんC・C・の胸をときめかせる効果があったのだが、今は理由が知りたくて、笑う男の顔を両手で挟んで問いかけた。

それでもルルーシュは、しばらくのあいだくつくつと喉を震わせていたのだが、軽く拗ね始めているC・C・の唇にチュツと音を鳴らしてキスをするなり言った。

「感謝をするなら、俺のほうこそだ。……俺に逢うまで、生きててくれてありがとう。C・C・――愛してる」

第二話：ルルーシュの誕生日（後編）

このお話は「R-18」の作品となります。
18歳以上の方は、下記のアドレスにアクセスしてください。

■ 掲載サイト：ノクターンノベルズ（男性向け18禁。
／noc.syosetu.com／http

■ コードギアス 幸福のかたち（第二話）：http://nc
ode.syosetu.com/n2035m／

番外編：幻のピザ部「第一話」（前書き）

第一話と第二話は、「ピザ部」を結成してから一年後のルルーシュとC.C.のお話です。

今回のお話は、その一年前「ピザ部」結成当時。

番外編：幻のピザ部「第一話」

「なア、ルルーシュ？　乳首が擦れて痛いんだが」

そんなセリフを風呂上りに、部屋に戻ってくると同時に言われてしまったルルーシュは、人生で初めて口に含んでいた飲み物を真上に吹き出すという水芸を経験させられてしまった。

「~~~~んなッ、ツンあにうおうッ?!」

もちろん重力の関係で、すぐにも頭上に降り注いできた水をボタボタ滴らせながら真っ赤になって息巻くと、ピンクのパジャマ姿の同居人は、露骨に眉間に皺を寄せながら憐れむような視線を注いできた。

「何かの発作か？　汚い奴だな。それに何を言っているのかちつともわからん！」

「~~~~誰のせいだと思ってるッッッ!!!!」

彼女の名前はC・C。

——本名？　……ふっ、そんなものは不特定多数に教えてしまうわけにはいかないな。

仮面の男『ゼロ』として、故国神聖ブリタニア帝国に挑んでいた革命も、ようやくこの数ヶ月でそれらしい区切りを手に入れられて、今は超合衆国を率いるCEOとして主に外交面での辣腕を振るっている最中だ。

そのかたわらでは、ルルーシュ・ランペルージとして平和的な学生生活を満喫し直しているわけだったが、C・Cもその範疇に加わっているのは、ほかでもない彼女自身がその生活に焦がれていたからだ。

「男女逆転祭とか、試験勉強とか、クラブ活動とか……愉しそうじ

やないか学校って：」

まずもって自分のほうからは何かを欲することはない。

唯一ピザに対しては異常な執念を燃やしているのだが、それだけだ。

むしろ無欲な自分の本心の隠れ蓑に利用しているのではないのか
と思えるような節もある。

そんな彼女が、ふいに口にしたひとこと。

なぜだかそれをルルーシュは、どうしても叶えてやりたいと思っ
てしまったのだ。

だから当面の落ち着きを取り戻したところで、すぐさまアッシュ
フォードへの編入手続きを実現した。

パスポートの偽造に比べれば、個人経歴の詐称など小手先のシナ
リオだけでも充分だった。

母方の遠い親戚ということにして、外見上の年齢にあわせて16
年間の生い立ちをでっち上げ、およそ2週間の詰め込みで編入試験
に備えさせた。

経験上、歴史と語学に関しては何の問題もなかったが、予想通り
理系を少々手こずって、毎日ひたいに青筋を浮かべながらずいぶん
激しくやりあったものだった。

それでも蓋を開ければ実にあっさり試験をパスしてしまったわけ
だから、C・Cの気持ち的にも、よっぽど学生生活に焦がれる気
持ちは強かったのだろう。

それよりむしろよっぽど問題が多かったのは、体面的な名前に関
してである。

「おまえ、私を何と言って紹介するつもりだ？」

あるときそんなふうに訊ねられて、ルルーシュは迷った末に一度
C・Cの本名を呼んでみた。

おそらくC・C.のほうでも呼ばれることを予測していたのだろう。

それでも、みるみるうちに瞳が潤んでゆく様子を確認して、すぐさま本名呼びは無理だという結論に達した。

「……し、仕方がないだろう？　ほとんど条件反射でこうなってしまうんだから……ッ」

思わず嘆息してしまうルルーシュに、C・C.も精一杯の強気を装いそう返したが、今まで何百年も『C・C.』としか呼ばれ慣れていないわけだから、その名前にはひととき特別な感慨が寄り添っているのだろう。

だから仕方なく追加したシナリオが、『宗教上の理由で』だ。

言ってみれば名前というのは個人を特定するための記号に過ぎないわけだから、無茶は承知で押し通してしまえば周りが勝手に順応してくれるものである。黒の騎士団メンバーと過ごしていた時代がそうであったように、いつしかC・C.という呼び名が至極当然に受け入れられ、その発展系として『Cちゃん』や『C様』というあだ名まで登場しているような昨今だ。

それはともかく、ルルーシュに人生初の水芸を経験させた発言を詳しく追及し始めると、C・C.はいたって平然とこう返した。

「だから、今日体育の授業でバレーボールの試合があったんだ。クラス対抗のトーナメント方式でな、私のクラスの男子チームは初戦で敗退してしまったが、今のところ女子チームは順調に勝ち進んでいる。もちろん私の活躍があつてのことだがな」

何を偉そうに……と内心では呟きながら、そもその論点をさらに掘り下げて詳細に訊ねると、C・C.は小首を傾げながら不思議そうに続けた。

「呑み込みの悪い奴だな。だから、あれは飛んだり、跳ねたり、けっこうな運動量があるだろう？」

「ああ、そういうスポーツだからな」

「そう、だから必然的に、体操服と激しく擦れてだな」

「ッ…そのための下着があるだろう？」

上体を揺らして両手を胸の上に添えながら、ひどくリアルなジェスチャーを交えて説明を加えるC・C.を、とっさに押し留めるようにしてルルーシュは慌てた様子で口を挟んだ。

けれどもC・C.は、ケロリとした表情で白状して見せたものである。

「だから、それを持ってないと言っているんだ」

「……………なん……………だと…？」

まさかの心境で茫然と訊ねると、C・C.はむしろ心外と言った様子で顔を顰める。

「今まではさほど必要ではなかったからな。拘束衣の下にはアンダーズーツを着ていたし、黒の騎士団では重ね着をしていた。気付いてなかったのか？」

「気付くかッ！！」

叫んでしまってから、ルルーシュはふと重大なことに気付いた。

「……………おまえ今、男子チームとか言っていたか？」

「言ったぞ？ クラス対抗のトーナメントだからな。明日も引き続き、体育館で試合を」

「——いいから休めッ！！ 体操服に着替えるのも厳禁だッ！！」

「どうしてだ？」

ルルーシュが思わず真っ赤になりながら叫ぶのに、C・C.は不思議そうな顔をして小首を傾げるばかり。

ルルーシュはさらにヒートアップして続けた。

「ウチの体操服は白だ。そんなものを素肌に着てみるッ……………す、透けるだろうが？」

さすがにどこがとまでは口に出せずに誤魔化すと、C・C.もようやく納得したという表情で頷いた。

「ああ、だからか。やけに男子から熱い視線を注がれていたのは」

「~~~~ッ!!!」

もう既に気付かれていたんじゃないかと思わず怒髪天をついてしまったが、当の本人は至ってケロリとしたものだ。

「細かいことは気にするな。それよりも『擦れて痛い』という物理的な被害のほうが甚大だ。なんとかしろ」

「~~~~ッッ! ~~~~~ッッッ!!!」

それ以上は何も言えずに頭を抱えて蹲ってしまったルルーシュの背中を、C・C・は膝頭を使って小刻みに揺らしながら、「なんとかしろ」としつこく続けた。

ルルーシュは、ややあってユラリと立ち上がると、せいぜいあてつけがましく吐息を洩らした。

「……だったら、もっと早い時間に言えいいだろう? もう今の時間では」

「言うつもりだったのに、おまえが帰ってくるのが遅いんだ」

そんなことを言われても、ルルーシュのほうでも一日ゼロとして活動していたわけだから仕方がない。

それを知りながら文句を言うC・C・を軽く睨みつけながら、ルルーシュはふたたびハアとあきらめの息を吐き出した。

「仕方がない。だったら、今からナナリーのところに行ってくるから、明日のところはそれで」

要するに、ナナリーの下着を借りてきてやると言ったわけだが。なぜだかC・C・の雰囲気がピシリと凍りつくのがわかった。

「……おまえ、喧嘩を売っているのか?」

「はア?」

何を怒っているのかがわからずに訊ね返すと、C・C・は琥珀色の瞳を凜猛に細めて精一杯にルルーシュを睨め付けた。

「この私が、ナナリーの、胸の、サイズで、間に合うと本気で思っているのか?」

「……………」

思わずまじまじとパジャマの上からC・C・の胸元を凝視してし

まったが、たしかに言われてみれば、咲き始めてまもない薔薇の花弁のように可憐なナナリーの胸元とは、若干サイズが違うようだ。ルルーシュも認めた。

「だったら、今からシャーリーのところに電話してやるから、おまえが自分で事情を話して」

「――おまえ、重ね重ね、喧嘩を売っているのか？」

たちまち、熱気を感じるほどの殺気を向けられて、ルルーシュも途方に暮れてしまった。

「別に大きい分には構わな――ツぐ…ツツ!!」

「かまうわツツ!! 人のコンプレックスを刺激するなツツ!!」
気にしていたのかと、胸倉をギリギリ絞り上げられながらルルーシュは感心してしまう。

「だったら俺にどうしろと言うんだッ?!」

「作れ!」

「作れるかッ!!」

「フツ、口ほどもない。主夫暦8年が聞いて呆れるな」

ここで乗せられてはC・Cの思う壺だとわかっているのに、それでもルルーシュは声にならないほどの憤りを感じた。

「――チッ!」

鋭く舌を鳴らしてきびすを返すと、パソコンを起動して下着メーカーのサイトを検索し始めた。

そこに掲載されている商品の説明から大体の形状を確認すると、おもむろにメジャーを片手に席を立つ。

「おい、トップとアンダーのサイズを測らせろ。その差を立体的な碗型に展開すればだな」

「ふん? 要するに、脱げばいいんだな?」

言って、さくさくとパジャマのボタンを外し始めるC・Cに、ルルーシュは慌てて視線を外した。

「馬鹿がッ! キャミソールぐらい着ていないのか?」

「馬鹿はどっちだ? そんなものがあるくらいなら、そもそもこん

な事態には」

至極もつともなことを言いながらパジャマの上衣を脱いでしまったが、胸元を腕で隠しているのにホッと安堵の息を洩らして、ルルーシュはC・C・の背後に回った。

「……だったら、明日の予定を空けておけ。ちょうど土曜日だろう？」

「まさかとは思うが、女性用の下着売り場に同行するつもりか？」

「仕方がないだろう？ おまえはまだ地元にな案内なんだから」

「まったくおまえは、変なところで過保護だなア」

クスクスと他人事のように笑うC・C・に、内心では激しくムツとしながらも手際よくサイズを測り終えたルルーシュは、その測定値を元に大体の型紙を作成した。

ちようにどよい布地など用意しているわけなかったから、大判の白のハンカチ2枚で代用した。

そこまでは思いのほか簡単に完成したのは良かったが、問題は、そのカップの部分はどうやって胸部に貼り付けるかだ。

「おい、ルルーシュ。別に形状にこだわらなくても、ビキニの上の部分で構わないんじゃないのか？」

悩んでいる横合いから勝手に手を伸ばして、サイトの検索を始めていたC・C・は、Hカップ巨乳が売りのグラビアアイドルのブログサイトを表示させると、「ほら見てみろ」と冷静に指で示した。

ルルーシュは、そんなサイトを俺のパソコン履歴に残すなど赤くなりながら、一瞬後には画面に食い入るように二人で肩を並べて、仔細に形状を議論し始めた。

「フンッ、目の錯覚を利用して、ずいぶん小さな布地を使用したものだが。要するに、肝心の部分さえ隠れれば、残りは紐でも構いはしないのだろうか？」

「いや、待て。これは目の錯覚と言うよりも、かなり確実に」

「ルルーシュ、訊いてやるのはこれが最後だ。――私に、喧嘩を、売って、いるのか？」

議論に熱が入るあまり、してはならない反論を思い切り真面目に
してしまったのに気付いたルルーシュは、冷静に赤くなりながら、
そういえばと、今更のようにソファの上に放置したまま忘れていた
紙袋の存在を思い出す。

吹きながらルーシユがその紙袋を取り上げると、すぐに横合いからC・C・が袋の中を覗き込む。

「…ちよ、おま…っ！何か着てから、こっちを向けよっ！」

「変に意識するなよ、色ガキが。どうせすぐに試着するのだから同じだろう？」

「ほら、これならちようどいいだろう？　色がライトグリーンというのが気になるが、それこそおまえの髪なら目の錯覚だ」

しかしC. C. は、ルルーシュの言い分にはロクに耳を貸さないで、ガサガサと紙包みのほうを開封し始めた。

「いや、それが、実は咲世子が……」

16

仕事柄、サイズの目利きには自信がありますからと。

そういえば、あれはどういう意味だったのだろう？　といまさら首を傾げるルルーシュのかたわらで、すばやく包装を解き切ったC・C・が、にわかに絶句した様子で鋭く眼光を光らせた。

「……ルルーシュ？　私は、最後だと断ってあったはずだな？」

「——こ、これはッ……誤解だッ!!」

「今度と言う今度は、許さんッ!!」

なんと中から飛び出してきたのが、まさしく女性ものの下着で。どこからどう見ても、C・C・のサイズに合わせて見立ててあるのがわかってしまう品物だったのだ。

要するに、炊事から洗濯まで家事全般を一手に担っている咲世子が、事前に細やかな配慮を示していたのだが、忙しさにかまけているうちに、肝心のルルーシュがすっかりそれを忘れていたのだ。

「おまえのおかげで私は……ッ!　——脱げッ!　今から同じ目にあわせてやるッ!!」

「やっ、止めるッC・C・ッ!　目がマジだぞッ!？」

「当たり前だ。わたしは心底マジだからな」

「やッ、あっ、あっ、止ッ……うあああああッッ!!」
いつしか壁際にじりじりと追い詰められていたルルーシュに、今しもC・C・が飛びかかった瞬間だった。

「やあ、ルルーシュ!　——うわあッ」

「ルルッ、遊びに……って、いやあああッ!」

突然開いた自動扉の向こうから顔を覗かせたスザクとシャーリーに思い切り見られてしまった。

上半身裸のC・C・に、床の上で馬乗りになっている姿を。

シャツを剥かれてたまるものかと必死の抵抗を続けているうちに、偶然そうってしまったわけである。

脱兎の如くに逃げ出したシャーリーのほうはともかく、現場に残

ったスザクには絶対零度の視線を向けられて、さしものルルーシュも掛ける言葉を失った。

今の状況では、何を言っても苦しい言いわけにしか聞こえないのが重々わかり切っているわけだから。

しばらくその様子を凝視していたスザクは、俄かにのっそり部屋の中まで踏み込んでくると、問答無用でルルーシュの胸倉を掴んで立たせた。

「ねえ、ルルーシュ？ 一応聞いておくけど、今のこれは合意かい？」

C・Cの位置からは、スザクの目の大きさが元のサイズの半分近くに据わっているのに気付いたが、突然の出来事で頭に血が上っていたルルーシュは、まるきり状況が把握しきれていなかった。

当然ながら、頭に浮かんだままを憤然と叫んだ。

「——合意であってたまるものかッ!!」

「そう」

スザクは、それはもう美しく微笑んだ。

両手の指の骨をバキバキと盛大に響かせながら。

「おい、ちょ…待てッ、スザクッ！ おまえ、目がマジだぞッ?!」

「当然だろう？ 僕、心底マジだから」

「バカッ、話せば…うわあああああああッッ
!!!!」

親友ゆえに、ある意味容赦のない鉄拳制裁を加えられているルルーシュの姿を、とてものこと正視できずにC・Cは視線を外した。しみじみ唇を噛み締めながら、惜しい男を亡くしたと、つくづく

胸の内で思った。

「e
n
d
e」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2030m/>

コードギアス 幸福のかたち

2010年10月8日12時23分発行